

に対して最も敏感であったために組織から排除された自覚的部分のエネルギーは、既存組織の組織共同によって結果されることはあり得ない。このような図式が成立するのではないだろうか。

#### 5、運動の限界

反戦青年委の運動をもっとも特徴的に示した闘争は、職場や地域に潜在していた青年労働者のエネルギーを政治課題のもとに顕在化させることに成功したと言える。しかし同時に、そうした闘争の反面で青年労働者の個別的状況を切り離し、自らのエネルギーを街頭でしか表現しきれなかったという構図を負っていた。このことは「職場に反戦を！」の方針とともに、街頭から職場・生産点への還流が十分に実践できなかったことへの反省を意味するが、この問題は労働者の運動の在り方、そして組織形態へのより大きな展望とともに考察されるべきであろう。それは少数派組合あるいは第三組合といった反戦以後の模索と軌を一にするはずである。

#### 特集 新しい労働運動をめざして

### 新しい組織形態としての評議会 —パナクークの思想に即して—

労働者評議会の思想を最も体系化させた思想家であるアントン・パナクーク（一八七三—一九六〇）は、彼の生涯をかけての思想と実践の結実である労働者評議会について、繰り返し、熱情を

#### 補足

反戦青年委の運動を特徴づけた主要な考え方を取り上げたが、これに続いて実際の運動に沿って生じた諸問題を検討する予定であった。それらは、佐世保闘争で突如として運動を流動化させた大衆の自然発生性の問題から、現地闘争と地域個別闘争との関連、ゲバルトや労学提携、そして政治党派の問題、最後に前節でふれた生産点での労働者の闘争・組織をどのように考えていくのか、といった項目のもとに追求するつもりであったが、紙数および準備不足もあって、機会を改めて論じたいと思う。

#### 引用文献

- 1・2・5・6 高見圭司編著『反戦青年委員会』一九六八年
- 3 竹内静子「反戦派労働運動の到達点」一九七〇年
- 4 福岡労働者反戦闘争委編『反戦青年労働者』一九六九年

江 口 幹

こめて書いている。しかし、彼はそれを固定的なものとしては提示していない。彼にはいつも、労働者評議会がどういうものであるべきなのか、それは誰かの頭の中で考えられることではなくて、

労働者の闘争の現場で、そのおかれた条件の中で、労働者たち自身によって決定されるものだ、という配慮が働いている。

したがって彼は、たとえば、主著『労働者評議会』の主要部分を書いてからほぼ十年のち、一九五二年に、左翼社会主義者の小雑誌「フンケン」に次のように書く。

「『労働者評議会』、それは、決定的に構想され、あとはただその細部を完成しさえすればいい、といった固定的な組織形態を指し示してはいない。それは、一つの原則、諸企業と生産の労働者自治管理という原則なのである。この原則の実現は、それを実施する最良の方式についての理論的な討議などとは、全く無縁である。それは、資本主義的支配機構に対する実践的闘争の問題である。……労働者評議会、それは、（友愛が一つの役割を担う）階級闘争、国家権力に対する革命的行動を意味する。……労働者評議会の思想は、——明日、あるいは来年実施させる——実現のための実践的綱領というべきものを何一つ持っていない。それは単に、労働者階級が今なおその前におかれている、長い辛い解放のための、一つの道しるべの糸でしかない。」

ここには、労働者評議会が具体的な姿を示すのは、具体的な闘争の中だ、その闘争の過程にしたがって評議会は、さまざまな姿をとりうる、という考え方があふれている。したがって、パナークの評議会についてのイメージは、なかなかつかみがない、という性質がある。しかし、そうはいっても、繰り返し、おびただしき言葉で語っている彼の表現の中から、労働者評議会の姿は当然のことながら浮び上がってくるのであり、その多様な姿をとらえるためには、便宜的に、労働者の新しい組織形態としての評議会、闘う

組織としての評議会、社会管理の組織としての評議会、の三つの側面から見てみるのが妥当だろう。

パナークは、「組織、それこそが労働者階級の、自分たちの解放のための闘いの基本原理である」と考えており、実践の上での最大の問題は組織の形態にある、と組織の問題をきわめて重視している。そして、組織は、社会的な条件、あるいは闘争目的の違いによって、異った形をとることとなる。労働者は、歴史的にさまざまな組織を持った。労働者評議会は、その中でもっとも新しい組織形態なのである。パナークは、その新しさを説明している。

「組合、政党という古い組織形態と、評議会という新しい形態は、社会進化の別の段階に属し、全く違った役割を持っている。第一のものは、資本主義制度の中で労働者階級の地位を確立することを目的としていたし、資本主義の発展期と結びついていた。第二のものは、労働者権力を創設すること、資本主義と諸階級への社会の分化を廃止すること、を目的としている。それは、衰退期の資本主義と結びついている。」

上昇し繁栄する資本主義制度の中では、評議会の組織は不可能である。その時、労働者は、彼らの生存の条件を改善することのみを気にかける。それは、組合と政党の行動を可能とする。衰退する資本主義の中、危機に陥している際には、それらの型の行動は空しく、それらにすがりつくことは、大衆の自治的な闘争と彼らの自己活動の発展を抑制することしかない。

緊張と増大する反逆の時期に、国全体にストライキの運動が勃発し、資本主義権力が基礎から動揺する時、大衆が行動に移る時、

古い組織形態は、その位置を大衆の自治活動の新しい形態にゆずる。」

ここには、古さと新しさが概括的に述べられているが、その相違をもっと的確につかむためには、労働運動の歩みを歴史的に見直し、そこで何が古く、何が新しいかを考察してみなければなるまい。パナクークは、一九三八年に「リヴィング・マルクシズム」誌に発表した論文、「組織の問題についての総括的な考察」の中でそれを行っているので、しばらくその叙述を追ってみることにしよう。

#### まず資本主義の初期の発展期。

労働者たちは、この時期に組合を結成しはじめた。孤立した労働者は無力の状態に追い込まれていたため、労働者たちは仲間たちと団結して、闘い、資本家と労働時間や労働力の価格について話し合うこととなった。

資本主義生産の中で、雇用主と労働者の利害は対立している。全体的な社会的生産物の分配をめぐる、階級闘争が起きる。普通、労働者たちは彼らの労働力の対価、労働能力を維持しつづけるのに必要な額、を受け取る。生産の中のその残りが資本家階級の分け前となる。その利益を増大させるために、資本家たちは賃金を引き下げ、労働時間を引き延ばそうとする。それで、労働者たちが自分たちを守ることができない時期には、賃金が生きるのに必要な最低限よりも下がり、労働時間は延び、労働者たちの肉体的精神的な健康がそこなわれ、社会の将来をおびやかすまでにいたる。

そうした時、自分たちの生存のための労働者の奇烈な闘争の果実である、組合の結成と労働条件を定める法律の制定が、資本主義制度の中で正常な労働条件を恢復するのに欠かせないものとなった。搾取者階級自身も、突然の凶暴な爆発という危険回避のために、組合は必要なのだ、と結局は認めるようになる。こうして、労働者の一定の利益擁護が、資本主義の安定に役立つという範囲で、許容されることとなった。

この時期には、政治的な組織の発展も見られた。ヨーロッパでは、労働者たちは、封建制度に対するブルジョアジーの闘いの中に引き込まれ、中産階級の一党派と同盟する階級政党を結成し、政治的な諸権利、組合の権利、結社の自由、普通選挙、民主的諸制度を獲得するために闘わねばならなかった。それらの諸政党は、綱領の中で、階級闘争の最終的結果としてのプロレタリア革命、共產主義的ないし社会主義的生産方式の創設をうたった。

しかし、資本主義がつづく限り、実際の闘争は、直接的な必要と生活水準の擁護の枠を越える害はない。民主主義制度の中で議会、社会的な各階級の利害が対立する場となり、そこでは、大小の資本家、土地所有者、農民、職人、商人、実業家、労働者、それぞれの立場の代議士たちが、権力と社会的生産物の分け前をめぐる争った。社会主義諸党の使命は、労働者たちの直接的な利益を満足させるよう政治面で闘うことにあり、それらの党は、そうして労働者票を獲得し、その影響力を増大させた。この時期には、評議会の生まれる基盤は、まだ作られていない。

ついで、資本主義の発展期。

かつての小さな作業場は、何千人、何万人という人を使う工場や大企業となった。資本主義と労働者階級の拡大は、それぞれの組織をも拡大させた。初めは地区的なグループだった組合が、何十万人というメンバーを擁する、全国的な大連盟となった。それらは、大規模なストライキを支持するために多額の資金を、また相互扶助の基金として更に巨額な金を集めた。

そこで、指導的な官僚階層——理事長、委員長、書記長、新聞編集長といった過大な司令部——が発展した。「雇用主たちと交渉し取引することを任務としたこれらの人物たちは、回り道をし、状況の中でうまく立ち回るのに慣れた専門家になった」。彼らは、新聞の内容も基金の使い方も、すべてを決定した。これらの新しい主人たちの出現により、下部の組合員たちはほとんどすべての権限を失い、そうして労働者の組織が、組合員に対する権力機構に変貌した。組織が過度に大きくなり、大衆はもう、自分たちの声を反映させることができなくなったのだった。

同じことが、政治組織の中でも起きた。初めは宣伝者たちの小グループだった政治組織が、大政党に変った。それらの真の主人は、議会に選出された人々となった。彼らは、代議士を職業にした。彼らが、論説を書き、下級の幹部を指導し、党の政策に優越した影響力を及ぼし、事実上その路線を決定した。確かに下部の活動家にも投票権があり、党大会に代表を送ることもできたが、その権限は形ばかりのものとなった。

社会主義諸党、他の諸党も、「職業的政治屋たちのグループ」「スローガンによって票集めをし、彼ら自身が権力を行使しようとする」グループと変らなくなる。多数の代議士を選出するよう

になると、反動勢力に対抗し、議会での多数派となるために、他の諸党と同盟した。社会主義諸党員の、市長や自治体議員も多く見られるようになり、彼らのうちの何人かは大臣や国家のもっとも高い地位につくに至った。

「これらのポストに一度つくと、彼らはもはや、労働者階級のみの代表として行動することも、資本家に対決して労働者のために統治することも、もちろんできなかった。真の政治権力と議会の多数派は、搾取者階級の手中に移った。社会主義者閣僚は、社会全体の利益、つまり資本の利益に従わざるをえない。彼らは、おそらく、労働者たちの当面の要求を満足させる性質の措置を提案され、他党に対してそれを採用するように説く。彼らは、仲介者に——仲買人に——なる。長い商談のあとで、彼らはやっとなさな改革を手にする。彼らは労働者に、それが第一級の改革なのだと思わせたがる。そんなリーダーたちの道具である社会主義党は、それ以後、問題の改革を擁護し、労働者たちにそれを承認させようとする。自分たちの利益のために闘うことを訴える代りに、党は、労働者たちを眠らせ、階級闘争から逸脱するためにすべてをする。」

この資本主義の発展期に、労働者たちは、その富とともに法外に増加した、資本家階級の前におかれた。金融と産業の少数の大実業家への資本の集中、雇用主たちの同盟は、きわめて強く、攻略することがほとんどできない力を生んだ。そして一方、市場と原料をめぐる国際的な競争は、資本の利益率を低下させた。資本家たちは、搾取率を高めること、つまり実際の資金を引き下げることをはかった。労働者たちは当然のことながらこれと闘おうと

する。

しかし「古いやり方は次第に活用しえないものとなった。雇用主と交渉しても、組合指導者たちは、もはや大したものゝを資本家から引き出さなかった。資本家の力を知らないわけではなく、闘うことをあまり望まず（というのも、この種の闘争は、財政的に組合を破滅させ、彼らの存在そのものをも危うくする怖れがあったから）、彼らは雇用者の提案を受け入れることを強いられた。したがって、彼らの主要な活動は、労働者の不満を鎮め、もっとも都合のいい形で雇用主の申入れを提出することにあつた。この局面ではまだ、リーダーたちは対立する階級間の、ブローカーとして役立っている」。

しかし、その役割が消滅する時が来る。労働者たちが、組合指導者の提案を拒絶し、闘争を続行しようとしたらどうなるか。労働者たちは、「自然的な形で」「組合を気にすることなく」「しばしば彼らの名で結ばれた契約を無視して」闘いはじめる。その時「資本家に対する反逆は、同時に伝統的な組織形態への反逆となる」。労働者たちは自発的に新しい組織形態を創りだす。ここで労働者評議会が登場する。それは、誰か仲介者を期待するのではなく、労働者たちが直接決定し、管理し、行動する組織である。

労働者評議会の組織形態としての新しさは、革命についての展望の相違という点からも理解することができる。

これまで大半の人々は、「あくまでもかつてのブルジョワ革命の様相の下にプロレタリア革命を考えよう」とした。つまり「次々に惹き起される一連の局面、第一に政治権力の制覇と新権力の

樹立、ついで法令による資本家階級からの収用、最後に生産過程の再組織」という過程を考えた。しかし、「この場合、一種の国家資本主義以外には達しえない」。

パナクークが考える革命、労働者評議会に期待される革命は全く別のものである。それは、政治権力の仲介を待つことなく、労働者階級が自分たちの組織によって直接生産手段を奪取し、生産の管理に当り、ひいては社会を管理することを目指す。「資本主義制度においては、生産手段の所有者が社会的生産物を独占し、剰余価値をしまい込み、労働者階級を搾取している。搾取は、労働者階級が生産手段を奪取する日にしか終わらない。彼らが自分の生活を彼ら自身で管理しうるのはその時のみである」・生産手段の所有が、資本家から国家の官僚たちの手に移ったというだけでは、何ら問題の解決にはならない。「プロレタリアートが自分の運命の主人に実際になるためには、彼ら自身の組織と新しい経済秩序の諸形態とを同時に生み出さなくてはならない。これら二つの要素は、切り離しえないものであり、それらが社会革命の過程を構成する」。いいかえれば、労働者たちは、「ブルジョアジーに対するプロレタリアートの階級闘争の組織」「闘争の中で階級を統一させる組織」とともに、「生産の新しいあり方の組織」とを同時に作り出すことを求められているのであり、その要求に呼応するものが労働者評議会である。

労働者階級が、「強力な統一した大衆行動ができる集団に組織されえた時」革命ははじまる。バラバラな個人をしか牛耳ることのできない資本主義は無力となる。そして、「それらの組織された大衆が、革命的行動に突入する時、既成権力が麻痺し解体しは

じめる時、旧政府の役割は、労働者の組織の手中に落ちる」。その時から、社会生活に欠くことのできないもの、「生存に必要なすべての品物の生産が、労働者共同体の任務となる」。労働者階級は、生産手段を所有するとともに、生産を組織し、確保しなければならぬ。

こうした革命の展望に立つてみると、「資本主義上昇期に生まれた、組合と党という組織形態は」、もはや何の役にも立たないものになっている。それらは「事実、指導者のための機関に變貌し、革命的闘争に参加することができないし、それを望みもしていない。闘争は指導者たちの事業ではない。労働者のリーダーたちはプロレタリア革命を嫌悪する」。それは、彼らの地位を脅かすからだ、したがって革命のための闘争を進めるためには、労働者たちは新しい組織形態を必要とするのである。

労働者評議会の新しさはまた、民主主義の内容の相違という点からも理解される。

民主主義は、小さな村々の中で、住民たちの総会によって実施されたものを起源としている。しかし近代的な町や国においては、人口が夥しく増加したために、それは不可能である。市民たちは、「彼らを代表すると見なされる、何らかの中央機関への代表を選出することによってしか、彼らの意志を表明しえない」。議会民主主義の下では、それらの代表たちは、「良心に反しない限り」自分が欲したように行動し、決定し、投票し、統治することは自由である。しかも、議会の議員たちの地位は、選出されてから一定の年度は保証されている。市民たちが主人であるのは選挙の時

だけで、それが過ぎれば彼らの権力は消滅する。代議士たちは、いつか選挙母体の前にまた立たねばならないことを意識せざるをえない、という制限を除けば、何年かの間、行動する自由を完全に持っている。それに彼らは、大規模な組織的運動や、スローガンや、煽動的な決まり文句で、選挙民を籠絡する。したがって、議会制民主主義の下では、「真の主人、決定するものは、全く市民ではなく、議員たちである」。

これに反して、評議会への代表たちは、いわば《ヒモつき》である。彼らは委任された権限以外のことはできない。「彼らの唯一の使命は、自分たちを代表するように選んだ、労働者グループの見解を示すことにある。彼らはいつでも解任しうるので、彼らに委任した労働者たちは、すべての権力を維持している」のである。

一方また、議会民主制下の選挙民たちは、自分たちの選択で誰かを候補に指名する可能性すら持っていない。候補者は、政党が彼らに提示するものだから。それに、もし市民たちが彼らの都合で候補者を決め、議会に選出したとしても、彼らは決して政府を組織することはできない。議会民主主義の下では、行政と立法の分離があり、「実際の政府、民衆を支配する政府は、高級役人からなる官僚階級によって構成されている」からである。要するに、労働者階級にとって、「議会民主主義は偽造の民主主義」でしかない。それに対し、「評議会を通じての代表制は、真の民主主義、つまり労働者たちによる彼らの事業の直接管理」を意味する。

議会民主主義は、大きな資本主義的利益集団が政府に圧力をか

ける政体以外のものではない。代議士たちは、農民、商人、実業家、労働者といった各階級を代表しているが、彼らは自分たちの選挙民の共通の意志を代表しているわけではない。なぜなら、ある行政区の選挙民たちは、たまたま同じ地域に住んでいる、資本家たち、労働者たち、小売商人たちという個人の寄せ集めでしかなく、いかなる共通の意志をも持っていないからである。

これに対して、評議会への代表者たちは、全員の意志を共通のものとして表明しうる、社会的に同質のグループによって選出される。「評議会は、工場や大企業の中で毎日一緒に働いており、同じ敵対者に衝突している人々の、自然なグループを基礎としている」。行動を決定し、統一の中で友愛的にその行動を進めようとするのは、それらの人々である。彼らは、ストライキや闘争についてのみではなく、生産の新しい組織についての問題についても考えを表明する。そこには共通でありうる基盤があり、評議会による代表制は、村とか町とか、ある限られた境界の中、という道理に反する結合にもとづいてはいない。「それは、社会生活の唯一の実際の基礎、生産過程の中での労働者たちという、自然な結合にもとづいている」。

労働者評議会は、議会民主主義とは「全く違った代表制、闘う革命的階級の代表制」である。そこで代表されるのはプロレタリアートの利益のみで、資本家の代表の参加は許されない。資本家階級には、存続するためのどのような権利も認められない。生産手段は彼らから剝奪され、彼らは除去されるだけである。そして、評議会という同じ組織が、革命が進むにつれて、生産を組織する役割を労働者たちに確保させる機関となる。「生産が生産者たち

によって組織される時、かつての搾取者階級は、裁判という形をとることなく、自動的に参加から排除される」。それ以後権力は、労働者たちの組織、社会の基礎となっている生産機構によって行使されることとなる。生産の各部門から労働者代表を集めるそれらの機構は、いかなる生産的労働も行わない、搾取者やならざる者を受け入れることはない。そこでは「消滅しつつある搾取者階級を排除した、もっとも完成した民主主義、真のプロレタリア民主主義」が行われることとなる。（なお、つけ加えておけば、パナクークは、この『真のプロレタリア民主主義』を『真のプロレタリアート独裁』である、という風にしばしば語っている。もちろん、プロレタリアートの独裁と称する、一党の独裁あるいは少数指導者の独裁とははっきり区別してのことだが、独裁という言葉が、誤解を招いたり、物議をかもしかねない響きを備えていることが事実である以上、使用を差し控えるのが妥当ではないかと思う。実態さえ提示されていれば、名称にこだわる必要はない、と考える。）

パナクークはまた、議会によるブルジョア民主主義と、評議会によるプロレタリア民主主義の違いについて、それらが基盤とする階級と経済的方式の相違からも説明している。その相違のために、ブルジョア民主主義の下では、政治と経済が分離し、政治は職業的な専門家にまかされているのに対し、プロレタリア民主主義の下では、政治と経済は一体化し、政治に関する職業的専門家は消滅するのである。両者の間にはどんな本質的な違いがあるのか。

ブルジョア民主主義は中産階級の民主主義である。それは、独

立した小生産者からなる社会を基礎としている。それら小生産者たちは、彼らの共通の利益、つまり、秩序と治安、商業の保護、統一した度量衡と貨幣の制度、司法制度を守る政府を望んでいる。それらは、小生産者たちが欲するように事業を管理するのに必要なものである。彼らの関心の第一は私的事業に向けられている。社会生活の主要な要素である生産は、私的企業の中に分割されているので、市民たちがいつも私的企業にしか心をとめないのも自然なことである。そして、政治への関心は第二義となる。政治は専門家の小グループ、職業的政治屋たちにゆだねられる。

労働者たちにとっても事情はあまり変らない。彼らは普通、自分たちの当面の利益をしか心にかけていない。資本主義制度の下では、労働者たちは長い時間働かなくてはならない。すべてのエネルギーは、搾取の制度によって絞りとられている。精神的活動に当てる力はいくく僅かしか残されていない。彼らに政治への関心がないわけではないが、注意力の大部分は仕事に向けざるをえないので、彼らはまた政治を、政党の政治屋あるいは組合の指導者といった、職業的な専門家にまかせている。労働者たちも、市民の資格で選挙で投票し、彼らを代表する代議士に多少の意向を反映させることができないうわけではないが、その影響力は実に限られたものにすぎない。

これに対し、資本主義を倒したのちのプロレタリア民主主義は、明確に反対のものを経済的基礎としている。それは「もはや私的なものではなく、共同の生産にもとづいている。したがって、政治と呼ぶことを定められていたもの、あの共同の事業は、その付属的な性格を失い、各自にとって思考と行動の主要な目的となる」

「。それまで専門家たちにとっておかれた政治という領域は、生産の過程そのものと一体化し、私的事業と政治との分離は、共同生産とともに終るからである。そして、「もはや全員の事業を取扱うために、職業的な人間の、グループないし階級の必要はなくなる。生産者たちは、彼らの行動を調整する害の、彼らの代表を介して、彼ら自身で彼らの生産的活動を管理する」にいたる。

要するに、ブルジョア民主主義は「過去から遺された、衰えつつある制度」であり、プロレタリア民主主義は「懐胎されつつある制度、未来の制度」である、とパナクークは結論的にいつているが、彼の説明によって労働者評議会の《新しさ》の輪郭がとらえられた今、われわれは、労働者評議会の二つの側面、闘う組織としての側面と社会を管理する組織としての側面、いいかえれば、革命の進行のぐく初期の側面と、革命がかなり進んだ時期の側面との二つの時点に立って、もう少し詳細に検討を加えてみる必要がある。しかし、それについては機会を改めることにしたい。

(注) 現在執筆中の『反政党論』(仮題、三一書房刊行予定)の中で、パナクークおよび彼の継承者たちの理論と実践については、詳しく紹介する予定である。